

【ごあいさつ】

BiPHのニュースレター6号をお届けします。

前号をお届けした1月からいちばんの進捗は、JICA草の根技術協力の覚書が交わされたことです。覚書の署名は契約までのひとつの山場とも言えるステップですが、これを無事行うことができ、6月のプロジェクトスタートに向けて、JICA中部との契約準備に取り掛かろうとしていたところで、新型コロナウイルス(COVID-19)のパンデミックによる影響で、世界的な移動自粛となったために、契約手続きを一時保留にせざるを得なくなりました。

この間も、パーツ大学公衆衛生学部の学部長はじめ、プロジェクトの主要メンバーとはオンラインで連絡を取り合ってきました。東ティモールは、日本より早い3月から非常事態宣言が引かれ、国際便は全てストップ、学校(大学も含む)は休講となり、ディリの街から人の姿があまり見られない状態だったようです。現在まで、感染者は24人(すべて軽症)、死者は0人だったとのこと。人と人とのつながりをとても大切にしている東ティモール人びとが、それを自粛して感染の流行を押しえ込んだということに、東ティモールの底力を感じました。

契約手続きは、先日再開しました。出来るだけ早期の開始をしたいと考えています。引き続きのご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。(代表理事:樋口倫代)



【署名式が開催されました】

JICAとの草の根技術協力事業契約に先立ち、パーツ大学・JICA東ティモール事務所・BiPHの三者による覚書が交わされ、2020年2月25日(火)に東ティモール保健省副大臣の立会いの下、署名式が執り行われました。

【勉強会が対面&オンラインに】

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策により、当面の間、勉強会を対面とWebの同時開催にします。これで全世界どこからでも参加可能に！
(詳細はP4にて)

【研修報告:UHCとNGOの役割】

2020年3月14日(土)にAHI(アジア保健研修所)と合同で職員研修会を開きました。稲場雅紀さん(アフリカ日本協議会国際保健部門ディレクター)をお招きし、アドボカシーとNGOの役割についてお聴きました。(稲場さんのご紹介は下欄で)

稲場さん曰く、NGOには「実施」と「提言」という2つの役割があるとのこと。NGOが市民に起きている問題に対し直接働きかけること、NGOが活動を通して得た知見を社会に提言していくこと。NGOはこれらを両輪で進めていくことが必要である、とのことでした。

例えばUHC(ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ)について、政策策定側は「国民の多数がカバーできればOK」と考えがちですが、それでは本当に必要な人がふり落とされてしまいます。「日本は健康保険制度があるからUHCは実現している」という人もいますが、たとえ制度上カバーされていても、真の意味ではカバーされているとは言えないような状況の人が少なくありません。

ふり落とされてしまう可能性のある人たちの健康問題に対して活動するNGOは多いです。でも、現場で活動するだけでなく、現場のリアリティを政策策定者に理解させることも必要です。現場と政策策定側をつなぐこと、これがアドボカシーであり、NGOの大切な役割である、とのことでした。

COVID-19に関して行政の動きを見ると、平時から顔の見える関係を作っているNGOの意見ほど素早く採用されているようです。日頃の取り組みがあってこそ緊急時の対策は日頃の積み重ねから生まれるのですね。”Health for All”に向けて、市民社会の一員としてNGOが何をすべきか、を改めて考える時間となりました。稲場さん、AHIの皆さん、ありがとうございました。

(稲場さんには7月の勉強会でもお話いただく予定です。どうぞ楽しみに！以下サイトの稲場さんの記事は勉強会の理解の助けとなると思います。<http://ajf.gr.jp/covid-19/>)

稲場雅紀さんのプロフィール：

京都府生まれ。「(特活)動くゲイとレズビアンの会」アドボカシー担当副代表理事などを経て、2002年より現職。2019年より(一社)SDGs市民社会ネットワーク政策担当顧問。国際保健に取り組むNGOのネットワーク「GII/IDI懇談会NGO連絡会」の代表も務める。共著に「NGOのためのユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)ハンドブック」(外務省)、「SDGsを学ぶ=国際開発・国際協力入門=」(法律文化社)など。



右端が稲場さん(写真提供:AHI)

【豆知識: Helping Health Workers Learn】

「Where There is No Doctor (医師のいないところで)」という名著をご存知の人は多いと思います。プライマリ・ヘルス・ケアの実践者であり、教育者であるデービッド・ワーナーさんが、1970年にスペイン語で書いた本で、現在にいたるまで、さまざまな言語に翻訳されて、改定も重ねられています。現在に至るまで世界中で読み継がれ、また、プライマリ・ヘルス・ケアの現場を助け続けて来ました。日本語訳も、(特活)シェア=国際保健協力市民の会により、2回出版されています。

同じ、デービッドさんの著作、「Helping Health Workers Learn」は、文字通り「ヘルスワーカー」の学びを助けるための内容となっています。思想的なことから、アプローチのしかた、特に母子保健と栄養に関連した具体的な教材利用や教材づくりの方法などが、時に厳しい皮肉も交え、デービッドさん自身による魅力的なイラストとともに紹介されています。表題に「ヘルスワーカー」と入っていて、保健に関する具体例が多いとは言え、教育一般に広く示唆を与える内容かと思えます。

デービッドさんの著作は4冊ありますが、彼の盟友でもあるシェアの本田徹さんによると、「何度かデービッドさんから、いちばん訳してほしいのは、Helping Health Workers Learnなのだと聞いたことがあります。」とのこと。保健や福祉の関係者のみならず、教育、開発、組織マネジメントなどの関係者にも、ひろく読んでいただきたい本です。英文は、書籍として購入できる他、デービッドさんの運営するNGO「HealthWrights」のウェブサイトを読むことができます。

【勉強会報告】

*毎回の勉強会は、ウェブサイトとFBで詳しくご報告しています。

2月7日:作業療法士が当事者になって見えたこと ～人工呼吸器をつけて地域で暮らす～

話題提供:押富俊恵さん(NPO法人ピース・トレランス代表)

押富さんは作業療法士であり、車いす&人工呼吸器ユーザー。尾張旭市を拠点に、地域福祉の問題について当事者目線での支援や啓発活動を行っています。

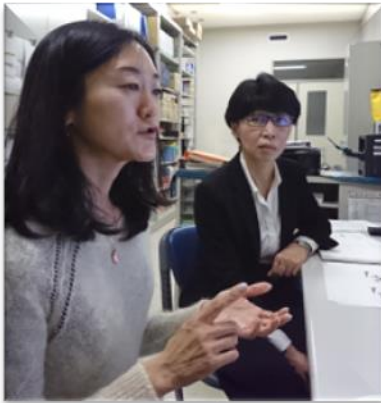
勉強会では、周囲が、特に医療従事者が、病気のある人や障害のある人を「治療の対象」と見て、「地域で生活する人」であるという意識が低いということ、さまざまなエピソードから気づかせて下さいました。

時間をどのように使うのかは人それぞれ。地域生活を支援するには、「その人らしい生活」を保障し、支援する視点が不可欠なのですね。



3月27日:日本に暮らす海外ルーツの人達の医療アクセス ～多文化ソーシャルワーカーと通訳の立場から～

話題提供:神田すみれさん(多文化ソーシャルワーカー、コミュニティ通訳者)



多文化ソーシャルワークは、海外ルーツの人が自国の文化と異なる環境で生活することで生じる心理的・社会的問題に対して、ソーシャルワークの専門性を活かして支援します。海外ルーツの人が直面する問題は各自で異なるので、支援もその人の状況に合わせて行うとのこと。最近は多文化ソーシャルワーカーの存在が少しずつ認知されるようになった半面、「彼らに任せておけば大丈夫」と丸投げされることもしばしばある、とのこと。そうではなく、連携チームの一員として、早期から相談者本人や専門家と一緒に問題解決に当たることが大切とのことでした。

(新型コロナウイルスの影響で初のWeb開催となりました。)

4月29日:緊急ミーティング コロナ禍の日本で生活している海外ルーツの人の声を聴こう!

話題提供:神田すみれさん、サインジュ・ラビンさん、カワサキ・マリアさん、中村博俊さん

新型コロナウイルス感染症の影響で緊急事態宣言が出る中、「日本で暮らす海外ルーツの人たちはどうしてるの?」の思いから、神田さんにコーディネートをお願いして急遽開催しました。

話題提供して下さった皆さんはそれぞれ当事者であり支援者でもあります。皆さんのお話から、コロナウイルス感染症の影響で、経済的困窮に直面している海外ルーツの人たちの実情と、支援活動の実際を知りました。

緊急時はピンチですが、それと同時にしくみを変えるチャンスでもあります。同時に、平時から制度整備を含めて「海外ルーツの人たちも共に生きる仲間」とする社会にしていくことが大切なのでしょう。



(5月開催予定の勉強会を上記に変更しました。)

【今後の勉強会予定(対面&Web同時開催)】

| 回 | 日時 | テーマ | 担当 | 会場 |
|----|-------------------------|--|----------------------------------|------------------------|
| 67 | 7月23日(木) 18:30-20:00 | 新型コロナ対策の中で考える『薬はだれのものか』-医薬品へのアクセスと市民社会- | 稲葉雅紀 (アフリカ日本協議会) | JICAなごや地球ひろば セミナールームB1 |
| 68 | 9月4日(金) 18:30-20:00 | David Wernerの“Helping Health Workers Learn”に学ぶこと | 清水香子 (アジア保健研修所) | 昭和生涯学習センター(予定) |
| 69 | 11月 (調整中) | 決まり次第ウェブサイトでお知らせします | | |
| 70 | 1月22日(金) 18:30-20:00 | 患者の立場から医療を考える場「パシエントサロン」の挑戦 | 石原八重子 (パシエントサロン協会/Fabry NEXT) | 昭和生涯学習センター(予定) |
| 71 | 3月26日(金) 18:30-20:00 | 日本に暮らす海外ルーツの人達の健康と課題 -知立市の多文化子育て支援活動を通して- | 坂本真理子 (愛知医科大学) | 昭和生涯学習センター(予定) |

昭和生涯学習センター 〒466-0023 名古屋市昭和区石仏町1-48
(アクセス：地下鉄鶴舞線及び桜通線「御器所」駅2番出口南約300m)
<http://www.city.nagoya.jp/kyoiku/page/0000051930.html>

JICAなごや地球ひろば 〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7
(アクセス：名古屋駅から徒歩13分、またはあおなみ線ささしまライブ駅徒歩5分)
<https://www.jica.go.jp/nagoya-hiroba/information/access.html>

*新型コロナウイルス感染症対策により、当面はWeb（オンライン会議システムZoom）併用で開催します。状況によっては開催方法変更もありますので、どうぞご了解ください。最新情報は随時ウェブサイトやFBページでご確認ください。

【会員募集】

当会は活動にご賛同いただける皆様からの会費で成り立っています。ぜひ会員としてご支援ください。会員の種別、払込先は以下の通りです。詳細はホームページ等をご覧ください。
個人正会員3,000円/年、個人賛助会員3,000円/年、法人会員30,000円/年
振込先：ゆうちょ銀行 00870-9-126227 シャ)ブリッジズインパブリックヘルス

【事務局ひとりごと】

COVID-19による外出自粛で、仕事や生活でのコミュニケーション方法が一気に多様化しましたね。アナログの大切さを実感しつつ、その一方で、リモートだからできることがあったり、リモートでこそ輝く人がいる、など新たな気づきもありました。誰もが自分らしく社会とつながれる、ダイバーシティ社会もすぐそこに？(石本)

会報「BiPHかわらばん」2020年7月号(通算6号)
発行：一般社団法人Bridges in Public Health
代表理事：樋口倫代
〒467-0027 名古屋市瑞穂区田辺通1丁目22番地2
TEL：052-846-5878 E-mail：biph-adm@umin.ac.jp
URL：http://plaza.umin.ac.jp/biph
FB page：https://www.facebook.com/biph.adm/



BiPH
Bridges in
Public Health